

評論

2012年の北海道

3月

サン・イチイチから2年
—いまだ終わらない東日本大震災—

横島 公司

「日常化」する震災

いわゆる3.11（サン・イチイチ）、東日本大震災から、まもなく丸2年が過ぎようとしている。3.11は、1都8県（数え方によってはさらに増える）に大きな被害をもたらした。地震とその後押し寄せた巨大な津波は、土地家屋はいうに及ばず、死者・行方不明者を併せ、およそ2万人という人命も飲み込んだのである。

東京都内では、地震による直接的被害よりも、陸、鉄、空すべての交通機関が麻痺したことが大きな問題となった。交通機関の麻痺は、必然的に都内に数十万人規模の「帰宅難民」の発生を惹きさせたためである。「帰宅難民」が解消されるまでには、ほぼ二昼夜を要したらしい。その後も断水、計画停電、そして放射能をめぐる問題が次々と勃発する。人々は未体験の危機に直面し、安全を求めて駆け回った。一部の人々は水や食料、ガソリン、電池などの買占めに走った…というのが、2011年3月から3ヶ月ほどの間に集中的に起こった出来事である。

だが今ではもう、何かを「買占め」るために並んでいる人などどこにもいない。一時期、これでもかといわんばかりに流されていたACジャパン（エーシージャパン、ADVERTISING COUNCIL JAPAN）のCMなど、今では苦笑まじりの「笑い話」になりつつある。

「測定器」を持って、公園や排水溝、植え込みをチェックする人たちも今では殆ど目になくなった。事実2011年5月初め、福島県福島市を訪れた筆者は、放射線測定値が平均 $2.2\mu\text{Sv/h}$ （毎時マイクロシーベルト）前後だったことを記憶している。しかし2013年1月の時点では $0.4\sim 0.6\mu\text{Sv/h}$ まで減少している。あくまで、空間線量の数値であるが、それでも目に見える形での数値減少が、多くの人々に安心感をもたらしたことは間違いない。

地震は今でも頻繁に起きている。今後日本は、数十年単位に渡って巨大地震に注意し続けなければならないらしい。事実、3.11以後の日本では、震度4～5前後の地震は幾度となく発生していたし、震度3以下に至っては、もう何度起こったかすら覚えていない。テレビの地震速報にも、気がつけば注意を払わなくなっていた。要するに我々は、地震が

頻発する、という状況に慣れていたのである。

その意味でいうなら2012年は、震災の生々しい記憶や意識が少しずつ薄らいでいった時間であった。換言すれば、3.11が緩やかに「日常化」していく時間であった。

復興への動き

一方で、東日本大震災の「復興」という観点からみるならば、2012年はそれなりに動きのあった一年といえよう。

まず、すったもんだの末、復興庁設置法が施行（12.2.10）されたことに伴い、同日、復興庁が設置された。

復興庁は復興に関する内閣事務を担う官庁として、10年間の期限付きで設置された官庁である。第3条および4条において、復興に関する企画、立案、そして総合調整ができると明記されており（条文上は実行を担わない官庁であると解釈できる）、さらに各省庁と同様に復興庁令を発する権限も有している。

同庁の本庁舎は東京（赤坂）に設けられ、その他に現地の出先機関として岩手・宮城・福島の三県に復興局が、青森・茨城には事務所が置かれた。本庁舎は被災地に設置すべきでは？という議論は根強く存在していた。しかし（当時の）与党民主党、野田佳彦内閣は、最終的に本庁を東京に構えると決定した。各省庁との「総合調整」を行うためとされるが、ぜひとも復興庁には各省庁の権限を適切に「総合調整」すること、さらに地方自治体と国の出先機関による「二重復興行政」の弊が生じることのないよう、期待したい。

また復興庁が担う復興事業は、基本的には前年（2011年）12月に、被災地復のために必要な財源確保を目的とした、いわゆる「復興財源確保法」によって担保されている。平たく言えば増税であるが、2014年より25年にも渡って全国一律に、広く薄く徴収されることになっている。税金の徴収という形ではあるが、北海道民もまた被災地の復興に「協力」しているといえなくもない。

震災後の日本人の変容

また2012年は、11年に引き続いて、電力をめぐる問題が全国的に大問題となった1年でもあった。菅（直人）内閣時に成立した、いわゆる「余剰電力買取制度」によって、太陽光発電を中心とした自然エネルギー発電は、この1年で大きく増加した。とくに広大な土地を有する北海道は、大規模太陽光発電所「メガソーラー」の有望地と目されており、2012年末の時点で、帯広や苫小牧で建設計画が進んでいる。今後、北海道の新たな産業に成長していく可能性もあろう。

また震災前と後で大きく変わったのが、日本人の節電意識である。それまでの節電＝エコという考え方を活かしつつ、さらに節電＝社会貢献、という観念が芽生えていったように思える。

3.11直後に首都圏で強行された、天下の愚策「計画停電」が北海道で行われることはなかった。しかし北海道でもこの冬、7パーセントの節電が要請されたように、日ごろ喧伝される電力不足への懸念は、道民を含めた日本人の節電（に対する意識）を確実に押し上げていた。こうして節電は、被災地であるないに関わらず、日本人のなかで「日常化」していったのである。

いわば、3.11の体験を受容し日常へと組み込んでいく過程で、日本人の意識は、少なくとも震災前と後でいくつかは変わったのである。

再び「震災」に遭遇—2012年12月7日

以下は、2012年の12月に、筆者が宮城県仙台市内で直面した地震をめぐる個人的な体験録である。



2012年12月7日17時18分、三陸沖を震源とするM5弱の地震が発生した。

たまたまこの日、別件の仕事で宮城県仙台市内を訪問中だった筆者は、その瞬間を仙台駅前のとある巨大ビルのなかで迎えた。

ご多分に漏れず、3.11以降、地震に「慣れっこ」になっていた筆者は、揺れを感じたとき「また余震か」という程度に感じたに過ぎない。「まあ、しばらくすれば収まるだろう」と、のんびり構えていたのだが、しかし、いつまでたっても揺れが収まる気配がない。これはもしかして大きな地震なのかもしれない。

建物は次第に前後左右に、例えるならばこんにゃくのように「ぐにゃぐにゃ」と揺れ始めた。「そうか、大地震ではビルはこんな風に揺れるんだ」などと考えていたら、「このビルは大丈夫です。倒壊の恐れはありません。直ちに係員の指示に従って、壁際または通路に避難してください」という館内放送が大音量で響いた（内容は正直うろ覚えなのだが、大要こうした内容を報じていたと思う）。係員の指示に従い、廊下に集まった避難者たちの群れは、（係員も含め）みな一様に不安げ表情である。もちろん私も、まぎれも無い当事者の一人なのだが、なぜか観察者の気分になっていた。これも地震に「慣れっこ」になってしまっていた弊害だったのかもしれない。

「早く逃げて」という声

おそらく1分程度で、揺れは収まったと思う（実際にはどの位の時間だったか不明であるが）。仕事もそのまま中止と相成ったので、急ぎ仙台駅へと向かうことにした。この地震規模では、交通機関への影響が懸念されたためである。

しかし仙台駅前までたどり着いてみると、そこはすでに多くの人で溢れかえっていた。

仙台市は人口100万人を誇る、東北第一の大都市である。人が多いのは当たり前なのだが、しかしこのときの仙台駅前は、普段大音量で聞こえるはずのクリスマス関係の音楽も聞こえず、客引きの声もしなかった。ざわざわざわ、というざわめきしか聞こえてこなかった。もう一つ聞こえてきたもの、それは仙台駅前の巨大なオーロラビジョンからのNHKの特別放送であった。多くの人たちが、それに目と耳を傾けていた（写真1）。

とくに印象に残っているのは「津波はあとからやってきます」「ただちに逃げてください」とアナウンサーが連呼していたことだった。後に、この連呼は「いたずらに不安を煽る」として一部では批判されたらしい。しかし現地にいた筆者にとっては適切な、有り難い情報であった。少なくとも、現地では「いたずらに不安を煽る」発言では決してなかったことは、明記しておきたい。

こうした報道が流れているからには、自分自身、誰かに心配されている可能性もある。安否を伝えておこうかとも思ったが、震災時の常。携帯電話はとっくの昔につながらなくなっていた。そういえば福島は無事だろうか。福島に住む友人のことが頭をよぎった。もしフクイチが再び被害を受けていたとしたら…しかしあまりにしんどい想像だったので、途中で思考を止めた。

サラリーマンに観光客、帰宅途中の中高生など、時間の経過と共に仙台駅内の人は増える一方である（写真2）。いつ新幹線が再開するかもわからないというし、この様子では、あわてても仕方ない。とりあえず人波を避けながら空きスペースを見つけ、そこに滑り込むことにした。

まずは一息。と思いきや、そのスペースにはまだ10代であろうか、1人の女の子がすでに丸まっていた。よくみるとその子は泣いていた。電話機を手にして「逃げて、お願いだから逃げて」と泣きながら訴えていた。自分の近しい誰かに、逃げてと伝えているのだろうか。いたたまれなくなり、そこをすぐに離れた。

その後、大きな余震が引き続き起こらなかったことは何よりの幸이었다。2時間ほど待って、少しずつ新幹線が動き出し、筆者もかろうじてその日のうちに東京まで戻ることが出来た。

だが東京ではごく普通の、いつもと変わらぬ日常が展開されていた。

仙台でのあれほどの切迫した空気感が、東京には全く伝わっていなかったのである。この空気では、NHKの報道が「不安を煽る」と批判されるのも無理はない。



結論から言えば、この地震によって、大きな被害が出ることはなかった。そしてこの地震は、巨視的にみれば3.11後に数え切れないほど発生した余震の、少しだけ大きかったもの、という事実以上の意味を与えられることはないのかもしれない。

しかし被害がなかったからといって、この地震を忘れてしまって良いとは思えなかった。この地震の一端を示すことで、「震災はまだ終わっていない」事実を伝えることが、少しは出来るかもしれない。

このように思い至ったことが、小稿を執筆する一つの動機となったことは確かである。



写真1 地震直後、仙台駅前で流されていたNHKの特別放送



写真2 次々と人が押し寄せる仙台駅